

# ある女性宣教師の戦後通信： エスタ・L・ヒバードの 1946年11月～1947年1月のハガキ

枝 澤 康 代

## Abstract

In this article, I am going to deal with 40 postcards that Esther L. Hibbard wrote to her parents from November 1946 to January 1947, when Japan was still under the control of the SCAP (Supreme Commander for the Allied Powers) and the only correspondence allowed between the US and Japan was by postcard. Hibbard arrived in Kyoto on October 29, 1946 and the first postcard she wrote was the one dated November 10, 1946. From then on she wrote 40 cards until SCAP opened the mail service to letters in January 1947.

These 40 cards are invaluable records of a woman missionary who came back to Japan soon after the war and helped people who were suffering from lack of food, clothes, fuel, etc. From the cards, we learn that even American missionaries experienced censorship and significant lifestyle restrictions, though they worked enthusiastically and wonderfully to help the Japanese.

Although the postcards are personal records, they are worthwhile to keep and publish as testimony to the dedicated foreigners who served this country. Therefore, in this article, I have translated all 40 postcards into Japanese, and indicated one original postcard as a sample.

Please note that the circled serial numbers at the top of each postcard in translation were put there by the author for reference purpose only. The numbers with # were put by Hibbard herself for her own use, but they are not in chronological order. Therefore, the two sets of numbers have discrepancies.

## I はじめに

本稿で扱うヒバード書簡は、エスタ・L・ヒバード（以後、ヒバード）が1946年10月1日に再来日し<sup>1</sup>、京都での生活が少し落ち着いた後、11月10日から翌年の1月7日まで、アメリカの両親に宛てて投函したハガキ40枚<sup>2</sup>である。このハガキは、第二次世界大戦後直ちに敗戦国日本に戻ってきた一人の女性宣教師が、爆撃の悲惨な残骸がまだあちこちに残り、食料も衣料も燃料もない、非常に厳しい生活の中で、日本人にどのように受け入れられ、人々の生活にどのようにかかわったかを生き生きと示す貴重な記録である。

ヒバードが、手紙ではなく、ハガキを両親に送った理由は、当時外国郵便には厳しい制限<sup>3</sup>があり、私信はハガキしか許されていなかったからである。封書が許されるのは、今回のヒバードの便りにもあるが、1947年1月からである。GHQが厳しい言論統制をしていたことは周知の事実であるが、どのハガキにも検閲の印が押されているのを見ると、アメリカ人の、宣教師にさえ、厳しい統制が及んでいたことがよくわかる。

40枚中39枚のハガキはタイプ打ちであるが、14cm×9cmの小さな紙面一杯に、出来るだけ沢山の情報を伝えたいとのヒバードの思いがあふれている。1枚に書き切れないときは、2枚にわたることもあり、また同じ日に5枚も6枚も投函する日があった。手書きは、1947年1月7日に投函された、最後の1枚だけである。次回からは封書が許されることが分かっていたので、気軽に手書きになったのではないかと推測される。

この40枚のハガキは、ヒバードの個人的な、特殊な記録ではあるが、当時ヒバードと同じような働きをした宣教師が沢山いたことを想うと、苦しい環境の中で、必死に日本の復興に尽力した宣教師たちの働きの一例として記録に残す意義があると思われる。本稿では、ハガキ全文の日本語翻訳と、1葉の原文と検閲印のある表書きを見本として提示することによって、この貴重な資料を紹介したい。

なお、以下の翻訳では、資料整理のために、○囲いの通し番号をそれぞれのハガキの先頭に付け、原則として日付順に並べた。#の付いた番号は、ヒバードが付けた番号であるが、一部ダブっているところがある。特に、通し番号の⑮以降は、ヒバードの番号と食い違いが起きていることをご了解いただきたい。

## Ⅱ ヒバードのハガキ（1946年11月～1947年1月）

①

# 1 11月10日

お母様へ

10月1日と3日付けのハガキが2、3日前に到着し、とても嬉しく安心しました。郵便は待っていればちゃんと届くことが分かってよかったです。

到着してからは、毎日歓迎会の連続です。女子大学、1939年度卒業生、国際女性文化協会、米国大学婦人協会、同志社教会、そして加藤家<sup>4</sup>の方々、皆さんが私たち<sup>5</sup>をもてなしてくださいましたし、私の手帳にはまだもっとたくさんの約束が一覧になっています。1939年卒の同窓生たちは、よく知っている学生の家で、すき焼きをご馳走してくれました。その人は、同志社大学の教授と結婚して、2人の可愛い子どもがいます。卒業生たちは、その時に小さな礼拝を計画してくれ、とても感激しました。

②

# 2 11月10日

卒業生の一人は、焼け出され、フィリピンにいる夫から2年間も便りがありません。別の人は、窮乏生活による病気の悪化で、父親と兄二人と妹も亡くし、今は家族たった二人の生き残りとして、お母さんと住んでいます。三人目の人は、系列の梅花女学校<sup>6</sup>で教えていますが、満員電車で立ちっばなしで、1日5時間も通勤しなければなりません。しかしみな元気で、私たちとまた会えることに大変喜んでいます。

毎日、生活上の新しい問題にぶつかっています。このハガキの切手のため

に買うことのできた唯一の糊は、濃い茶色で、嫌な臭いの、すぐに薄い紙にしみてくる代物です。切手はミシン目がなく、一枚一枚切り離さないといけません。

③

# 3 11月10日

電気は、日中だけパンやクッキーなどを焼くのに十分な強さとなります。寺地さん<sup>7</sup>は今日合格点のクッキーを作りました。先日の夜には、電気ロースターで焼いた美味しいキャセロール料理をいただきました。電熱器の前で髪の毛を乾かしたり、アイロンをかけているときにブラウスを焦がしたりしましたが、そんなことが出来るのは、いつも日中だけです。5時には電灯は薄暗くなって、ほとんど文字は読めませんし、暖かくすることなど論外です。夕食後に出来ることはベッドに行くことだけですから、8時の授業に間に合うように起きることに問題がある筈がありません。

私の配給券が昨日届きました。雨でしたが寺地さんは私たちの配給を受け取りに行き、肉の缶詰の山をかかえてフラフラになりながら戻ってきました。運搬用のワゴンか車の付いた籠があれば良いのですが。

④

# 4 11月10日

家の仕事は一人でするには荷が重すぎるのです。2人目のメイドを雇うべきなのですが、問題は寺地さんに合う人を見つけることです。ボード<sup>8</sup>の判断は、私たちが本来の仕事に専念できるように、必要なだけ人を雇うべきだということです。

奉仕の機会はいくらでもあるようです。米国大学婦人協会は私たちにアメリカ生活の様々な面について記事を書かせ、それを翻訳して、冊子の形にして出版し、日本中に配布したいようです。また女性問題を議論する国際協会も計画しています。人々はアメリカ文化をもっと知りたいと必死になっています。

レセプションで湯浅博士<sup>9</sup>にお会いしました。痩せておられましたが、精力的でした。息子さん<sup>10</sup>は膝の結核のために足が不自由になっていますが、少なくとも命の心配はもうないようです。

⑤

# 5 11月10日

フランシス<sup>11</sup>のドイツ人の友人で、先日の夕方に来た人は、家のリビングルームの家具の少なさに驚いていました。（実際、食堂用のテーブルセットの他に、6脚の椅子と寝椅子が一つあるだけです。）昨日、その友人は特別にあつらえた、とてもきれいなつつじの花柄のコップとお皿のセットを送ってきてくれました。フランシスが「日本を離れるときに<sup>12</sup>」家具類をあげた人は皆それを返してくれています。寺地さんも私たちが家の中に残したものをよく保管してくれ、彼女と家族が疎開した時には、その家具類を一緒に持って行ってくれさせたのです。だから私たちは結局のところそれほど困っていません。壁は財務部の費用で修理してくれるらしいですが、先日その代表が調べに来ました。だから、ダンダン、マスマス良くなっていくでしょう<sup>13</sup>。

これが届くころには、もうクリスマスになっているでしょうから、特別の愛を贈ります。

⑥

# 6 11月17日

愛しいお母様へ

ウィスコンシンで、舌で自分の鼻の先を触って見せてくれた日本人学生を覚えていますか。実は彼から手紙を受け取りましたが、私の到着を新聞で知ったことと、アレン博士がどうしておられるかを尋ねてきています。イダさん<sup>14</sup>は今では系列の頌栄保育専攻学校<sup>15</sup>で教えています。お父さんに、もしアレン博士を知っているなら、あるいは知らなくても、このことを伝えるように頼んでください。

電熱器は今も机の下から私の足の周りに素晴らしい温もりを送ってくれて

います。日中は実によく温めてくれます。昨夜はじめてベッドで電気敷毛布を使いましたが、とても心地がよかったです。昨年の夏、自分で編んだ緑色のセーターがなかったら、どうなっていたか分かりません。スーツの上着の下に着ると寒さをほとんど感じませんから。

⑦

# 7 1946年1月17日

最愛のお父さんへ

お父さんが折角注意深く梱包しなおしてくれた荷物がひどく壊れた状態で届き、粉ミルク1ポンドが消失してしまいました。これは最初から無理だったようです。いずれにしても手間をおかけしました。

西海岸のストライキのせいで小包や郵便物がまだ止まっているようですね。他には何も届きませんから。このハガキが届き次第、5週間の間、毎週10ポンドの小麦粉を送ってくれませんか？パーコレーター用のコーヒーもそろそろ必要になります。バターは十分にあり、なかなか美味しいです。肉の缶詰は配給に入っています。だけど、家からの乾燥スープと乾燥野菜は歓迎です。お父さんがガレージに蓄えている薪の1／10でも手に入れることができれば、と思います。でも心配しないでください。何とかやりますから。今は以前よりもいたって元気です。

⑧

# 8 11月24日

お母様へ

万歳！七面鳥が感謝祭に間に合うように届きました！だけど、どなたもお客に呼ぶ計画はしていません。というのは、木曜日は同志社創立記念の祝賀がありますし、たくさんの行事があり過ぎるほどありますから。その日の朝には、軍のチャペルで礼拝があり、同志社カルテットが歌うことになっています。

今週の木曜日には、ミシガンの2人の学生<sup>16</sup>が、フランスと私を将校ク

ラブのバロック様式のお城のようなところでディナーを御馳走してくれましたが、そこは昔美術館でした。新鮮なロースト・ポークとアイスクリームを久しぶりに味わうことができて素晴らしかったです。それに比べて、次の日曜日にこの人たちが夕食に來られたときお出しするものは、きっと粗末だと思われることでしょう。

金曜日の夜にコニー・ダンカンさんがまたやってきて、日本を離日するのが12月2日まで延期になったとのこと。呉でのとても面白い話をして、楽しませてくれました。

⑨

# 9 (日付なし)

同志社の学生による、私たちのためのコンサートは大成功でした。1000人もの人々がいたに違いありません。プログラムが時間通りに始まり、順調に進められたのは、私がここに来て以来初めての経験です。委員長は素晴らしい歓迎のスピーチをしてくれ、私はそれに何とか日本語で答えました。いろんな新聞社のカメラマンに3回も写真を撮られ、持っていた花束は毎回取り上げられました。演奏会のスターは、自分はシャリピアン<sup>17</sup>の生まれ変わりだと信じているバス歌手で、黒人靈歌をロシア風に歌ってくれました。会場の雰囲気は非常に真心のこもった丁寧なもので、戦前の大学生の態度とは比べ物になりませんでした。フランシスと私はとても励まされました。同志社創立記念日のコンサートも同じようにうまくいくことを願っています。

⑩

# 10 (日付なし)

瀧山先生たち<sup>18</sup>とのお茶の予定をしていた日に、フランシスはそのことをすっかり忘れて、全く変な、軍のチャプレンと面白半分のドライブに出かけ、そのために私は一人でお相手をしなければなりませんでした。先生たちはサンドウィッチ、サツマイモに栗の入ったスープ、2種類のお茶、おせんべいとケーキを出してくださいました。先生のお兄さんは絵を描いてくださり、そ

ここに私たち一人ずつにふさわしい詩を書き添えてくださいました。フランシスが6時頃に戻ってきたとき、チャプレンのお陰で軍の購買部で買うことのできた宝物の食料品を車に満載していました。だから、お茶の借りは十分返したと思ったようです。

アリス・ケーリ<sup>19</sup>から今ニュースが届き、それによると、手違いがあったのですが、私は本当は今年の日本委員会<sup>20</sup>の議長になる筈だったとのことでした。運営委員会はこの大切な時に私のようなダークホースを任命するという恐ろしいリスクを冒そうとしているようです。ダウンズさん<sup>21</sup>やモランさん<sup>22</sup>のような熟練の先輩を前にして私が議長をしているのを想像してみてください。

⑪

#11（日付なし）

学長の息子さんで、大阪の大丸百貨店と関係のある人が、先日学校に訪ねてきて、アメリカ女性について女性従業員のクラブで話をしてくれないかと言ってきました。日本語でそのような話をするには、どんなに大変な準備をしないといけないかをよく考えないで受けてしまいました。しかし、このことは、これから役に立つ関係を築き、何らかの成人教育をする素晴らしい機会のようにも思います。

今週紫明小学校<sup>23</sup>の父兄会で「民主主義における子どもの家庭教育」の話をする事を考えると、不安で一杯です。どうも学位が高ければ、日本語のどんな課題でも瞬時に話す能力があると思われるようです。

次の日曜日から、男女を含めて選抜した同志社大学生の英語バイブルクラスを教え始める予定です。人数を最大15人に設定しました。

⑫

#12（日付なし）

水曜日の午後、フランシスと私はお湯を沸かし続けていましたが、たった一人しかお客は現れませんでした。呼び鈴が壊れているのに気付くのが遅すぎました。他の人は来ても、がっかりして帰ったのかもしれない。パーコ



レーターをティー・ポットとして使っているのを見ると笑われるでしょう。だけど、それが私たちが持っているたった一つのポットなのです。ピーナッツバターとシロップを混ぜたものを上にぬったリッツのクラッカーは、とても人気のお茶菓子です。クラッカーの在庫がいつまでも続くわけではありませんから、このハガキが届いたらもう少し送ってください。

この家の配線はひどい状態です。電気屋さんは、必要を満たすための安全で適切な配線をキッチンとするには、6000円以上かかるだろうと見積もっています。ミッション<sup>24</sup>の会計担当者が次の土曜日に来た時にこの問題を解決してもらいたいと思っています。このままでは、不便でなりません。

⑬

#13（日付なし）

通りの向かいに住んでいる整骨師さんは、私たちが戻ってきたことをどんなに喜んでいるかを見せるために、何かしたいと思っていました。それで奥さんと一緒に、うちの庭の一部を耕して、玉ねぎの苗、ソラ豆、白菜を植えてくれました。私たちは大根、レタス、エンドウを既に植えていて、芽がはじめています。十分に霜よけができれば、食卓にきれいな緑の野菜を載せることが出来るでしょう。

今日の午後、大宮御所の庭の紅葉を見に行きました。あんなに炎のような赤色、深紅、真黄色の素晴らしい取り合わせを見たことはありません。それがすべて緑の池に反映しているのです。ダンカンさんはカラー写真を撮ったので、現像したら送ってくれると約束してくれました。

もしこのハガキがクリスマスに届いたら、私からの挨拶だと思ってください。お母さんとお父さんのことを思い、去年のお祝いを思い返しています。

心からの愛をこめて エスタ

⑭

1946年11月24日

大切なお父様へ

10月19日付け発送の荷物をしっかりと荷造りしてくださったので、全部よい形で届きました。ろうそくだけが、きつと詰め物として入れられたのだと思いますが、かなりひどくボロボロになっていました。

青色のシャンブレーのシャツをあげた人たちはお礼をあまり言いませんでしたが、それでも他の白いシャツと同じように着ています。人前で色のシャツを着たことがなく、どうも体裁が悪いと思っているのだと分かりました。お父様は色シャツ以外は着たことがない(?)と言うと、皆は安心したようです。

すみませんが、お父様の持っている *Readings in English Prose and Poetry*<sup>25</sup>を教育のために分けていただけませんか？それを学校で使うのに再販してもらいたいと思っています。2階の本箱の下の棚にあります。印刷物として郵送できるようになったら、出来るだけ早く送ってください。

たっぷりの愛をこめて エスタ

⑮

#14 1946年12月1日

お母様へ

小学校での集まりは人生で一番興味深い経験となりました。約100人のお母さんたちがいましたが、小さい子どもを連れている人もいました。50分間話しましたが、英語の話ほど手間はかかりませんでした。それから続いて50分間参加者からの質問に答えました。私は文字どおり演壇を降りて「床から」答えました。参加者に恥ずかしがらずに発言してもらうには、畳に膝をついて話をしないといけなかったからです。私が子どもの教育について、まるでベテランのようにアドバイスをするなどと聞くと笑うでしょうね。むろん、ロニー<sup>26</sup>の子どもたちは何度も登場して名前を売りましたよ！翌日校長先生が100円相当のギフトと別のグループに同じ題でもう一度講演をしてほしい

という話を携えてやってきました。おそらく英語を教えるのと同じように役に立つことが出来るかもしれません。

⑩

#15（日付なし）

大阪の女子校<sup>27</sup>でも話すように頼まれましたが、そこには600人の生徒がいます。もっと難しい仕事になるかもしれませんが、いずれにしてもやってみようと思います。

木曜日に、フランシスと私は自宅とアトリエが一緒になっている芸術家の家に招かれました。そこには約10年前に同志社を卒業したお嬢さんがいました。この人たちはこの世的なものは何不自由ありませんが、家はグリーンランドと同じくらい本当に寒かったです。すき焼きの夕食後、お茶のお点前があり、その後に紅茶と娘さんが焼いたスパイス・ケーキを頂きました。お嬢さんは新聞記者をしておられ、しっかり仕事をしておられるようです。

金曜日の午後に、フランシスと私はカーブさん<sup>28</sup>の旧宅に行き、家具を見ました。門は両方とも止め金で閉めてあったので、私たちはよじ登らないといけませんでした。家は汚れていますが、家具はほとんど壊れていません。この家よりはるかに上等に建てられています。

⑪

#16（日付なし）

新しいメイドが、自分の持ち物を全部持って今朝到着しました。でも、どれくらい居てくれるかは別問題です。寺地さんは彼女の知性に少し疑問を持っています。今週は寺地さんには過酷な週でした。木曜日は一日中停電で、私たちの食事を作るのに困り果てていましたから。炭を正当な手段で手に入れるのは不可能のようですし、不正は許されませんから、燃料なしで行くしかありません。しかし、昔の教え子の一人が薪を一杯送ってくれました。うちの暖炉でキャンプファイヤー料理でも作りましょうか！

軍のチャペルでの感謝祭礼拝は多くの参列者がありましたが、部屋はとて

も満員といえる状態ではありませんでした。同志社卒業生カルテットはよく歌ったと思います。オルガンが歌の真最中に止まったのですから！何人かの軍人の奥さんに会いましたので、私たちが今週計画しているレセプションのことを話しました。来てくれるといいと思います。日本人のご婦人方は薪を提供してくれます。

⑮

12月1日

お父さんへ

私の会計の最新状態を教えてくれてありがとうございます。ミシガン大学は、お父さんが私の博士論文の必要部数を送ってくれたのに対して、50ドルの保証金をもう返金してくれましたか？<sup>29</sup>もしまだなら、せかせるのがいいと思います。

このハガキが到着するまでにブルー・クロス社の健康保険の支払い<sup>30</sup>が来ないときは、マーガレット・ヒルさんに手紙を書いてください。住所は、11 S. La Salle St., Chicago です。彼女はクオータ・クラブ<sup>31</sup>の以前の委員長で、まだブルー・クロスの人々と関係しています。誰よりも問題を整理してくれるでしょう。

三番目の荷物が今週良い状態で届きました。粉ミルクとプルーンが入っていました。これからもどんどん送ってね！食べるものは十分にありますが、さつま芋とスパムの缶詰肉以外に少し変化があると嬉しいですから。

愛をこめて エスタ

⑯

1946年12月15日

お父さんへ

10月10日に郵送して下さった粉ミルクの2番目の荷物が2、3日前に、最初のから1か月遅れで、しかしよい状態で届きました。どうして2つの荷物は離れてしまったのかしら？マディソンから届いた荷物は、3週間ぶりだっ

たのです。きっとどこかに私を待っている荷物が山のように積み上がっているに違いありません。

何度も交渉の結果、やっと私たちの電気製品に合うように、家の電気の配線をやり直してもらうことになりました。日本式のお風呂もその内に設置してほしいと思っています。そうしたら、少なくとも週に1回は清潔になり、温まると思います。

私たちの食品貯蔵はまだ大丈夫です。フランシスと私が二人とも朝食にオートミールとコーンミールの粥をガツガツと食べ、しかもそれを好んでいるのを見たら、笑われることでしょう！

お父さんと YMCA がよい新年を迎えられますように。

エスタ

②⑩

#17 12月8日

最愛のお母様へ

軍の奥様方のためのパーティはとてもうまく行ったようです。来られた20人余りのご婦人方は、役に立つ、楽しいときだったと一応口を揃えて言ってくれました。家は食堂の窓にかけたクレトン生地のカートンと、椅子の新しいクッションで、とても居心地よく見えるようになりました。暖炉で小さな火を焚き、部屋は太陽の光もあたって、十分温もりがありました。新聞記者が二人やって来て写真を撮り記事にしました。それは予定通り翌日の大阪毎日新聞に出ました。全米大学婦人協会は、アメリカ人の主婦たちの意見を聞いて、自分たち用に日本語対訳付きの料理本の再版を決定しました。またメイドの英語クラスを YWCA かどこか町の中心地で開くよう要望がありました。奥様たちのほとんどは、言葉のハンディにもかかわらず、お手伝いさんたちとうまくやっているようですが。

⑪

#18（日付なし）

私たちは学校でクリスマス音楽の練習を始めました。教会の聖歌隊は、「もろびと声あげ」と「荒野の果てに」を次週の日曜日に歌う予定です。大ページェントは、歌も付いて、20日と21日に栄光館で全学をあげて行われます。幸いなことに衣装や暗幕は戦前からのものが残っていました。そうでないと、この手のものを演じるのは無理だったでしょう。

土曜日に二人の学生が私たちを市内の有名な陶器作家で、民芸品の収集家でもある人の工房に連れて行ってくれました。その人は、長く使って何度も何度も磨かれた古い木の臼から数脚の椅子とテーブルを作っていました。私はそれを見たときお父さんのことを思いました。河井さん<sup>32</sup>は楽しい人で、何事にも少年のように夢中になります。お母さんがここに来た時に<sup>33</sup>彼に会えたらよかったのですが。

⑫

#19（日付なし）

水曜日の4日に、松井先生<sup>34</sup>のお宅で素晴らしいときを過ごしました。松井博士は、この民間情報教育局<sup>35</sup>の右腕であり、労働組合についての講演のために情報局の人たちと頻繁に旅行をしています。先生は本を1冊出版しておられ、あと2冊も計画中です。戦争中は自由思想のために目立たないようにしていなければなりませんでした、今は本領を発揮しておられます。民間情報教育局は、すべての時間を自分たちのために使えるように、同志社の職を当座の間やめてもらえないかとさえ頼んだのです。上の男の子は17歳で、高校生です。下の子はまだ中学生です。松井夫人は相変わらず優しいです。京都に来て以来の最上のすき焼きをいただきました。肉は神戸から取り寄せ、野菜はすべて先生のお宅の庭で栽培したものでした。松井先生ご夫妻は、お二人ともお母さんとお父さんのその後を熱心に質問されました。お二人は戦争中ずっと家におられましたが、唯一残念なのは、奥様の着物が盗難にあって全て失ったことだそうです。

②③

#19 1946年12月15日

お母様へ

私が大阪に講演に行った日は、幸運にも太陽が燦々と輝いていましたが、寒かったです。学校に着くのに約2時間かかりましたが、学校は爆撃で破壊された地域の真ん中にありました。まるで苦闘しているような、ねじれた大量の残骸を目のあたりにするのは初めての経験だったので、とてもショックでした。600人の女生徒が講堂に集まり、私が話し出す前から大きな拍手で迎えてくれ、まるで魔法にかけられたように40分間聞いてくれました。民主主義とは何かについて、具体的な例を挙げて、彼女たちが理解できるように話したつもりです。講演するようにと招いてくださった先生の報告から判断すると、生徒の中には話の内容をととてもよく理解した者もいたようです。その後、私は競ってサインを求める生徒たちに取り囲まれました。学校はまだ爆弾の跡を残しており、多くの者が家を失ったというのに、生徒たちの熱心さには驚かざるを得ません。

②④

#20（日付なし）

11時30分に大丸からの迎えの車が来ました。社長の里見さん<sup>36</sup>は、昔東京でYMCAの主事をしていた頃からお父さんを知っているそうです。彼は立派な風貌の人で、お父さんより2歳だけ年下です。話して楽しい人です。ランチにロースト・ターキー、ポテト、ハウレンソウ、フルーツ・サラダ、フランス菓子とコーヒーを頂きましたが、それは感謝祭のお祝いで感じたどんなどんな物足りなさをも補って余りあるものでした。そのクラブの会合には、約100人の女性が集まっており、とても静かに聞いてくれましたが、質問はあまりありませんでした。私がまごついた質問は、日本の家庭生活における科学的進歩についてでした！我が家の圧力釜について説明することで精一杯でした。

昨日アーモスト館で、私の論文について、小さいけれども熱心に聞いてく

れる学生と先生との集まりで話しました。論文がここにあれば良いのですが。

②⑤

#21 (日付なし)

その後土曜日の午後に、10月から始まった5回シリーズのオルガン・コンサート最終回が栄光館でありましたが、満員の人で埋まりました。適切なオルガン曲の選定に加えて、同志社混成合唱団がメサイアから数曲を歌いました。コンサートの終わりには、白のガウンを着た聖歌隊員がキャンドルを持ってステージに立ち、全聴衆はクリスマス・キャロルを記憶だけで歌いました。歌詞を暗記している人がそんなに大勢いると思うと、深い感銘を受けました。アメリカの聴衆ならせいぜい1－2節しか歌えないのではないかと思います。

クリスマスの季節に影を差すのは、ミシガンの以前の教え子の一人が死亡したことです。九州に向けて離陸しようとして墜落した飛行機に乗っていたのです。彼がここの民間情報教育局で素晴らしい働きをしたことは、たくさん日本人が役所にお悔やみにやって来たことでも証明されます。

②⑥

#21 1946年12月22日

親愛なるお母様へ

月曜日の午後に同志社神学部の後援のもとにクリスマス・コンサートが開かれました。私に英語と日本語の両方で詩を読んでほしいとのことでしたので、クリスティーナ・ロセッティのクリスマス・キャロルの “In the bleak mid-winter” を選びました<sup>37</sup>。しかし、プログラムの呼び物は、アメリカ軍のブラスバンドで、行進曲とクリスマスの讃美歌を総出で演奏しました。栄光館はそのような音楽会となるといつもそうですが、満員でした。

その夜、私は川田さん（浦富キャンプ<sup>38</sup>の学生の一人）と歌舞伎を見に行きましたが、演技は他の年ほどでなかったと思いました。あるいは、私の歌舞伎への好みが薄れてきているのかもしれませんが。でも、肩にかけた棒に両



腕を縛られた男の苦労話の狂言は実に楽しかったです。

②⑦

#22（日付なし）

木曜日、思いがけず、昔神戸女学院と彦根高等商業で教えていた二人の方をもてなすことになり、とても楽しかったです。二人とも現在教育局にかかわっておられ、オナー・ソサエティ<sup>39</sup>と同窓会を組織するために京都に来られたのです。私たちは、小学校6年、中学校3年、高等学校3年と大学4年の新しい教育制度、それには3年の短期大学のコースがないのですが、その制度がもたらす問題の最善の解決策は何かを議論しました。教育局は、また来年の夏から教職課程を設けることで英語の教授法を改善しようと計画しています。私もそれにかかわりたいと思っています。

乾燥セロリの葉を次の荷物に入れてくださると嬉しいです。私たちは緑の野菜がとても不足していますから。

愛をこめて エスタ

②⑧

#22（日付なし）

木曜日の夕方、シャイベリー家<sup>40</sup>の義理の息子さんと、今は連合国総司令部の宗教局の仕事をしておられる方がディナーに来られました。フランスはこの機会を逃さず、なぜ宣教師は軍の郵便物特権から外されているのかを尋ねました。彼によると、アメリカ軍郵便物の特権が、これから先もずっと、すべての宣教師にも当てはめられるとすると、職員が処理しきれなくなるだろうとのことです。しかし、規則の見直しがあり、今後日本に戻ってくる宣教師は、貨物は3トンの持ち込みと、食料品は年に1トンの輸入が許されます。当局はどうやって我々一人一人がどれくらい持ち込んだのかを記録するのかしらと思います。きっと山ほどの書類に書きこまないといけないことでしょう。

このハガキがそちらに着くころには、アリス・グイン<sup>41</sup>はアメリカに戻っ

ている筈です。彼女が来るときに物を持って来てもらうには、アメリカン・ボードを通して連絡してくれたら嬉しいです。

②9

#23（日付なし）

クリスマス・ページェントは、21日土曜日に栄光館で行われました。劇の始まる2、3時間前に、市内全域が停電になりました。必死の電話のやり取りで、ようやく電気はページェントに間に合うようにつくようになるとの約束を取り付けました。実際は30分遅れましたが、電気は戻りました。更に舞台のカーテンが途中で引っかかり、2度も修理しないといけませんでした。このような災難にもかかわらず、ページェントは敬虔に、見事に行われました。音楽はすばらしく、衣装は豪華でした。やはり会場は美しいものに飢えている人々で一杯でした。しかし、前のオルガン演奏会のときのように、ページェントに聴衆が参加する機会はありませんでしたから、皆がどのように受けとめたかは判断できませんでした。見に来たアメリカ人が多くなかったのは残念でした。きっと寒さに怖気づいたのだらうと思います。

③0

#24（日付なし）

火曜日の夜に、寮の学生たちが女子専門学校の先生方を招いて夕食会をしてくれました。驚いたことに、部屋はとても暖かかったです。いつものように、学生たちはフランシスと私をテーブル・スピーチに指名しました。私はドロシー・カーティスと4万個の紙風船の話をしましたが、とても楽しんでくれました。次に、学生たちが自分たちで計画した歌と寸劇を上演しました。一番上手だったスタンツは、理髪店の様子をあらわしたもので、登場人物は全部指人形でした。

バッド・ワイルさん<sup>42</sup>の追悼会がやっとアーモスト館で行われました。約50の人々が来られましたが、日本人がほとんどでした。フランシスはこういう時のために特に設置されたオルガンで、バッドの好きだった曲を弾きまし

た。どの暖炉も薪が勢よく燃え、テーブルには明るい色の菊が活けてありました。アンダーソンさん（パッドの上司）はブラウニングの『エピローグ』を朗読し、日本人カルテットが[次のハガキに続く]

③①

#25（日付なし）

アルカデルトの「死の陰の谷を歩むとも」とメンデルスゾーンの「ナイチンゲール」を歌いました。礼拝は全体で30分ほどしかかかりませんでしたが、とても印象深いものでした。大勢の日本人が参列したことは、まさしくパッドのすばらしい人柄への証でした。

フランシスはうちの庭からとってきた何本かの枝でクリスマス・ツリーを工夫して作りました。ミョウバンの濃い溶液に浸した刷毛で針葉樹の葉をなでつけて、雪まがいのものを作りました。今年は大きなクリスマス・ツリーを飾られたのでしょうか。

21日午前4時半の地震<sup>43</sup>は、とても怖かったです。というのは以前に感じたどれよりも長く揺れたからです。寺地さんは私たちが大丈夫かを確かめるために3丁先の家から走ってきました。地震の震動による津波で数千人が家を失いました。この国では、次から次に困ったことが起こります。

たくさんの愛をこめて エスタ

③②

1946年12月23日

最愛のお父さんへ

気温は今週零度以下に下がりましたが、ちょうどその時、暖房のために家の電気配線をやり直してもらっていたのです！だから暖炉の火に頼らなくてはいりませんでした。暖炉は見かけはよいのですが、満足のいくものではありませんでした。でも今はストーブ2つと、そこで燃やすのに使う1トンの石炭が約束されています。

私たちが使うためにピアノをこちらに送るという案をお母さんがどう思わ

れるか聞いてみてくださいませんか？ たった今公式通知をもらいましたが、日本に戻ってくる宣教師は、今後は3トンの貨物が許されるそうです。だから、アリス・グインに彼女の荷物と一緒にピアノを持ってくるように頼めるのではないかと思います。ピアノは私たちの仕事には非常に助けになりますし、アメリカの家に置いておくよりはるかに多く使われるでしょうから。

会館建設のキャンペーン<sup>44</sup>が順調に進みますようお願いしています。ヘレンによろしくお伝えください。

愛をたっぷり込めて エスタ

③③

#26 12月29日

最愛のお母様へ

今週、対敵諜報部隊<sup>45</sup>の仕事でここに駐屯しているミシガンの学生に再会しました。2か月前まで、福井県の部隊長でした。階級は軍曹でしかありませんでしたが。福井にいた間に、フランシスの教え子でピアノを勉強した女専の卒業生の家族と知り合いになりました。彼はそこの生活が大変気に入ったので、京都に来るよりもそこにずっと留まりたいと思ったくらいでした。私は経済学のフォーラムで彼に会いましたが、そこには京都大学の教授たちが参加していました。

月曜日の正午に、同志社同窓会は湯浅博士ご夫妻をランチに招き、すき焼きでもてなしました。お二人ともお元気そうでしたし、湯浅博士はパーティの人気者でした。

数人の学生が田舎の実家に帰省する前に、さようならを言いにやってきました。先日の地震で汽車は大変乱れているので、家に到着できない者がいるかもしれません。

③④

#27 (日付なし)

お母さんが11月8日に投函したハガキが今週届きましたが、他は何も家か

らは届きませんでした。ルイーズ・ポーターさんからの小包が、フランスへの約10個の箱と一緒にクリスマスの次の日に届きました。全て食用品が詰まっているので、お互いに助け合えると思います。いくつかの荷物がもし早く到着すれば、クリスマスに日本人の友人に分けてあげれるのにと考えていました。しかし日本人にはお正月の方がもっと大切ですから、食糧問題について日本人をまだ助けることができます。

火曜日の午後は、10人の同志社卒業生のグループがここに集まって、キャロリングに出かける前に、クリスマス・キャロルの練習をしました。寒さに負けないよう彼らにピーナツバター・スープをお腹いっぱい飲ませてあげました。そのあと、彼らは陸軍将校の家を含めて8軒の家をずっと歩いて回りました。

③⑤

#28（日付なし）

クリスマスの朝早く、キャロルを歌う男性の声で、しばらくあとには別の混成合唱のグループの声で、目を覚ましました。その声は、朝の静けさの中で、めったにないほど美しく響きました。朝食を終えて、プレゼントを開けるか開けないかのうちに、玄関のベルが鳴って、訪問者たちが次々と入って来はじめました。喜んで暖炉に火をつけ、一日中燃やしました。午後2時に神学部の教授の家でのお茶の約束がありましたので、お昼は軽く済ませました。予想通り、珍しいものを次から次へと勧められました。自家製のポップコーン、同じく自家製のロースト・ピーナツ、サツマイモのキャラメル、そして団子。子どもたちはみな音楽の才能があるので、私たちは一緒にクリスマス・キャロルを歌ったり、子どもたちのピアノの演奏を聞いて、楽しく過ごしました。教授の奥様というのが、10月に母親会で話すようにと私に言った人です。

③⑥

#29（日付なし）

クリスマスの夜には、ダンカンさんのオーストラリア人の友人で、呉のイギリス系の病院で病理医をしている人が、休暇の途中に立ち寄り、その夜泊まって行きました。昨年の夏に起こった脳炎の流行について、興味深いことを話してくれました。つまり医者たちが今考えているのは、あれは脳炎ではなかったということです。彼女は1、2か月後にオーストラリアに戻る予定で、日本を離れる前に古い日本を見たいと思ったのです。仲間たちはそのことに特に興味があるわけでないので、仲間を離れて、うちに泊まりに来ました。残念ながら、彼女の滞在は短かすぎて町を十分に案内できませんでした。私たちがしてあげたことに大変感謝してくれました。

翌日はとっても穏やかな好天の日でした。家から持ってきた光沢のあるインド更紗の残り布でデッキ・チェアを修繕する気分になりました。かなりの時間、たたいたり、ねじを取り付けたり、逆立ちでもしそうなくらいにあの手この手を尽くして、とても満足のいくものが出来上がりました。

③⑦

#30（日付なし）

同志社は薪でも石炭でも燃やせるストーブを貸してくれました。暖炉を閉じてしまうのは嫌だったので、ストーブのパイプを机の近くにある窓から外に出すようにし、ストーブを暖炉の反対側に置くことにしました。あと必要なのは、石炭だけです！家の配線のやり直しは、この家の電気製品の効率を非常に良くしましたが、それでもまだ十分ではありません。私は四六時中、緑色のセーターにラベンダー色のスーツを着て生活しています。その服が春までもってくれるようにと願っています。

このクリスマスは、まさに「鉢ではちきれそうに」になりました。寺地さんからは伊万里の鉢を二つ、星名先生<sup>46</sup>からは蓋付の深皿を、また高島さん<sup>47</sup>からは美しい縦溝彫りの鉢をもらったのですから。それを全部食堂の食器棚に並べました。私の伊万里のコーヒーカップもそこに一緒に飾ることが出来た

らしいのですが。

ウィスコンシンのお天気は、お母さんの膝にとって如何ですか？私はナイロンの靴下なしではとてもやっていけません。

③⑧

#31（日付なし）

土曜日、フランシスと私は京都帝国大学と関係のあるドイツ人夫妻を訪問しました。どこで入手したのか想像できませんが、銀色の飾りと小さなろうそくで全体を飾った、巨大なクリスマス・ツリーがありました。明るかったのですが、わざわざシャッターを下ろし、明らかに私たちを喜ばせようとして、ろうそくに火を付けてくれました。その間、レコードで「きよしこの夜」をかけてくれました。それは本当に *gemütlich* な（素晴らしい）ときでした。ご夫妻は戦争中もずっと日本におり、戦争が終わりに向かうにつれて、とても厳しい時を過ごされました。二人はナチ支援者ではなかったので、この陸軍訓練校の専任教員になりました。

ネイラー家が到着したかどうか気を付けておきたいと思います。その名前は11月に入手した扶養家族リストにはありませんでしたが、その後にやってきたのかもしれません。

ロニーとその家族に私の最高の愛を届けてください。毎日父さんとお母さんのことを思っています。

心からの愛をこめて エスタ

③⑨

#31 1月7日

最愛のお母様へ

既にラジオで放送されましたが、国際便は1月2日に手紙による文通が許されるようになりました。しかし、どの郵便局にも正式な通達が届いていないのです。京都という視野の狭い町が新しい制度に目覚めたらすぐに、お母さんに送る手紙の準備はもう出来ています。一方、このハガキは私が元気で

楽しんでいることをお母さんに再確認させてくれると思います。学校は来週の月曜日まで始まりませんので、この機会にたくさん人を訪問しようと思います。今日は、お寺の二人の尼さん<sup>48</sup>とランチを一緒にする予定です。

お母さんの膝の具合がよいと聞き安心しました。リッチーさんに感謝です。ご近所の皆さんによろしくお伝えください。学生の一人が書いたのですが、「新年によい欠乏<sup>49</sup>がありますように！」

たくさんのお愛をこめて、エスタ

④⑩

1947年1月7日

お父さん

今朝、卵が完全な形で到着しました。もっともアルミ箱はまるでフットボールの代わりに使われたようになっていましたが。お父さんの丁寧な荷造りに感謝します！金属製の容器は、物を保存するために捨てないで取っておきたいと思います。今回送ってくださった分で、海軍の余剰食品が届くまで、食べるものは間に合うと思います。

もしピアノの件がうまく行かないようなら、私はアリス・グインに小さなラジオを送ってもらいたいです。大きいのは、か細い電気には役に立ちませんから。

いつもお父さんを想っている娘より

註：

- 1 ヒバードは戦後の再来日にあたり、1946年9月30日、テキサス州ヒューストン港から S. S. Kendall Fish 号で出港し、パナマ経由で日本に向かった。1946年10月29日に神戸に上陸し、その日のうちに京都に到着した。（ウィスコンシン州歴史協会アーカイブスの1946年9月29日付けヒバード書簡及び、アメリカン・ボード宣教師文書 [ABC 16.4.1, v.68-69. Mission to Japan, 1940-1949, Documents] の1948年7月21日受領印付きのアメリカン・ボード日本委員会年次報告による。）



- 2 40枚のハガキの大半は、ウィスコンシン州歴史協会のアーカイブスに保管されている「ヒバード書簡」(Carlisle V. Hibbard Papers, 1811-1954 : (Call number: Wis Mss QN; PH 1556).)の一部であるが、3葉(⑬、⑭、⑰)だけは、ウィスコンシン大学アーカイブスに保存されているウィスコンシン大学 YMCA 関係の書類の Hibbard の項目 (Series 51/2 YMCA, Hibbard, C. V., Administration Records.) の中にある。

40枚のハガキは、当初は番号と日付が記載され、受取人が順番を間違って読まない配慮がなされていたが、時間が経過するにつれて、番号のないもの、番号が重複しているもの、日付のないものが出てきた。ヒバードの番号と日付について詳細に調べると、次のことが判明した。

- i) ヒバードは母宛のハガキにのみ番号をつけている。
  - ii) 通し番号⑧～⑬は、最初の⑧(＃8)に日付と“Mother dear,”の挨拶があり、⑬(＃13)の最後に“Esther”の署名がある。
  - iii) このことから、⑧～⑬は一連の便りであり、すべて11月24日に投函されたと考えられる。
  - iv) 以上のことから、その他のハガキも同様のルールを当てはめると、通し番号⑮～⑰は12月1日、⑳～㉒は12月8日、㉓～㉕は12月15日、㉖～㉗と㉘～㉚は12月22日、㉛～㉝は12月26日に投函された、それぞれ連続した便りだと考えられる。
- 3 日本への郵便規則 (*The Postal Bulletin*, Vo. LXVII, Sep.5, 1946, No.18960.)によると、以下の規則は1946年10月より有効とある。
- ・ハガキは、個人か家族宛のもので、英語、中国語、日本語、フランス語、韓国語、スペイン語で書かれていること。表書きは必ず英語で書き、補助として、上記の言語で書き添えてもよい。
  - ・一般小包は、重さが11ポンド(約5 kg)を越えないこと。週に1小包とする。小包の送料は1ポンドあたり14セント。小包の中身は、非生鮮食品、衣類、石鹸、郵送可能な薬品などの基本的な救援物資に限る。必ず Gift Parcel と明示すること。
- ★しかし、1946年10月までは、小包は1ヶ月に1個と限定されていた。それではほとんど助けにならないため、西海岸の在米日本人が中心となって、戦後日本を救済する「ララ物資」が始まった。(水野剛也著、「在アメリカ日本語新聞と「ララ」—シアトルの『北米報知』による日本救済報道 1946～1947—、海外移住資料館『研究紀要第3号』より)
- 4 この加藤家とは、同志社大学・同志社女子大学の英文学教授であり、共にミシガン大学に留学した加藤竜太郎・さだ夫妻のことと思われる。或いは、同志社中学

校校長で、同志社教会員でもあった加藤延雄先生のことかもしれない。

- 5 「私たち」とは、ヒバードとクラップ (Francis B. Clapp, 1887-1977) のことである。クラップは、1918年にアメリカン・ボード宣教師として初来日し、同志社女学校で音楽を担当した。ヒバードが1929年に初来日して以来、二人は同じ宣教師館に住んだ。二人の住んだ宣教師館は、もう一人の宣教師であるグウィン (Alice E. Gwinn, 1896-1969) も一緒に住み、3人の名前 (Clapp, Hibbard, Gwinn) を取って、クラバードイン (Clapp-bard-inn) と呼ばれた。
- 6 現、梅花女子大学。1878年 (明治11年)、日本で初めて牧師となる按手礼を受けた澤山保羅 (さわやま ばうろ) により大阪・土佐堀に開校。1926年に豊中に移転。同志社と同様に、アメリカン・ボードから宣教師が派遣された。
- 7 宣教師館クラバードインの戦前からのお手伝いさん。
- 8 アメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions) のこと。ヒバードが所属するアメリカの海外伝道団体。
- 9 湯浅八郎 (1890-1981)。日本の昆虫学者・教育者・キリスト者。第10代同志社総長 (1935-1941)。戦後、再び第13代同志社総長 (1947-1950) を勤め、また初代国際基督教大学学長 (1950-1961) を歴任した。
- 10 湯浅洋 (ゆあさ よう) (1926-2016)。湯浅八郎の長男。若い頃に結核で苦しみ、後年、形成外科医として、ハンセン病治療に貢献する。湯浅家とヒバード家は家同士の付き合いをしていたと思われ、ヒバードたちの帰国歓迎レセプションに湯浅洋も出席していた可能性が高い。
- 11 Francis B. Clapp (1887-1977) アメリカン・ボード宣教師。パシフィック大学大学院修了、ドイツに2年間音楽留学、同志社女学校 1918-1941、同志社女子大学教授 1947-1967。同志社女子大学音楽科の基礎を築いた。
- 12 この部分は、手書きで書き込まれたものであるが、その文字から、父の書き込みであることがわかる。書き込み理由は、娘の様子を友人・知人に報告するとき、読者に分かりやすいように説明を加えたと思われる。
- 13 この文の原文は、“So, dan-dan, masu-masu things will get better.” と “だんだん、ますます” の部分はローマ字で書かれており、母がまだ日本語をかなり覚えていることを示している。
- 14 イダは、ウィスコンシン大学に留学し、学生 YMCA でヒバードの父の世話になった。井田か、伊田かは不明。
- 15 現、頌栄短期大学。1889年、A. L. ハウにより、キリスト教主義の保母養成所として開設された。現存する日本最古の保育者養成機関。
- 16 ヒバードは、1944年6月にミシガン大学より文学博士号を取得したが、その前後にミシガン大学とノースウェスタン大学で日本語講師を勤めた。特にミシガン大

学にあった陸軍語学学校での教え子と戦後京都で再会することが多くあった。

- 17 フョードル・イワノヴィッチ・シャリャピン (1873-1938)。20世紀前半に活躍したロシア出身のオペラ歌手。声域はバス。
- 18 瀧山徳三 (1986-1973) と瀧山季乃 (1910-1993) 夫妻のこと。二人とも英文学者で、同志社女子大学教授。瀧山徳三教授は、第3代同志社女子大学学長。瀧山季乃教授は英文学科主任、ハーディ研究家。
- 19 Alice E. Cary (1890-?) アメリカン・ボード宣教師。大阪の淀川善隣館で奉仕。戦後は、1946年夏から1956年まで、ボストンのアメリカン・ボード本部で、日本担当幹事。同志社大学のオーティス・ケーリ教授の伯母にあたる。
- 20 “Japan Commission of the American Board” の日本名。アメリカン・ボードは、1810年に会衆派教会の海外伝道団体としてが設立され、日本では1869年から“Japan Mission of the American Board”(アメリカン・ボード日本ミッション)として伝道が開始された。1936年1月1日より「アメリカン・ボード日本委員会」と名称を変更したが、以前と同様の宣教活動が続けられた。戦後も“Japan Commission”(日本委員会)の名称を使用した。
- 21 Rev. Darley Downs (1894-1969) は、1919年に来日したアメリカン・ボードの宣教師。同志社中学で1919～1929年まで英語を担当した。長年ボードの日本ミッション／日本委員会の書記を務めた。同志社理事1955-1956、1960、同志社大学名誉神学博士1963年。
- 22 Rev. Sherwood F. Moran (1885-1983) は、1916年に来日し、主に大阪で伝道活動をし、淀川善隣館館長、日本ミッションの議長を歴任。1956年に引退し、勲5等を受賞した。
- 23 紫明小学校：京都市立紫明小学校（京都市北区小山東大野町55）。昭和5年10月に開校された伝統のある学校。同志社から近い。
- 24 アメリカン・ボードの日本支部のこと。通常、「日本ミッション」とか「ミッション」と呼んでいた。
- 25 *Readings in English Prose and Poetry* はヒバードと山中ソフィとの共著による日本人大学生にむけた英文学の教科書であるが、1934年に初版が平野書店から発行され、1946年には絶版になっていた。
- 26 ロニー (Rony) は弟 Russell Hibbard (1910-1987) の愛称。ラッセルには4人の子ども（一男三女）があり、1946年当時は、末娘を除いて、ちょうど学童期であった。
- 27 梅花女学校（前述、註6を参照）を指していると思われる。第二次大戦末期には、梅花のある豊中市は米軍の激しい空襲を受け、学校周辺は大きな被害を受けた。ヒバードは、戦後の一時期、梅花で非常勤講師を勤めた。

- 28 Rev. Edward S. Cobb (1878-1960)。同志社大学神学部教授。同志社に32年(1909-1941)在職した。新約、旧約、旧約外典の聖書研究家。同志社教会オルガニストでもあった。1941年に帰米後、日本には戻らなかった。
- 29 この件について、ヒバードの父は、10月2日(ヒバードがテキサスのヒューストンから日本に出航した2日後)に、ミシガン大学に以下の手紙を送り、50ドルの請求をしている。ヒバードは、このお金がまだ届いていないのであれば、問い合わせるようにと言っている。

Oct. 2, 1946

オッケルバーグ部長殿

娘のエスタ・L・ヒバードは、日本に向けてもう出帆しました。出発前に娘は私に、博士論文25部をそちらに送るようにと言いました。印刷所からちょうど送ってきましたので、貴殿が1946年6月18日付けの手紙でエスタに指示されたように、別便で26部を、1946年8月18日付けでそちらにお送りします。

50ドルの領収書を同封しますが、エスタによれば、その50ドルは返金可能であるとのこと。お手数をおかけしますが、エスタ・ローウェル・ヒバード宛の小切手を作ってください、上記の住所の私宛にお送りください。

敬具

C. V. Hibbard

(ウィスコンシン大学アーカイブス、Series 51/2 YMCA, Hibbard, C. V., Administration Records. より)

- 30 ブルー・クロスは保険会社。ヒバードは再来日する前に、アメリカン・ボードの指示で詳細な健康診断を受け、その折に小さな手術をしたが、その費用に対する保険金の支払いのことを述べている。(C. L. Hibbard の Blue Cross 社あて、1946年10月21日付け手紙より)
- 31 クォータ・クラブとは、Quota International Club (女性、子ども、聴覚障害の支援を目的とする非営利ボランティア団体、1919年創立)ではないかと思われる。(https://en.m.wikipedia.org/wiki/Quota\_International)
- 32 おそらく、陶芸作家で、柳宗悦らと共に民芸運動に深く関わった、河井寛次郎(1890-1966)のことと思われる。河井須也子著『不忘の記(わすれじのき)―河井寛次郎と縁の人々』によると、寛次郎は昭和21年(1946年)から同志社女子専門学校で美術を教えたとのことである。新制女子大学でも嘱託講師として「芸術鑑賞」を担当した。(1949年版『学生必携』p.14)
- 33 ヒバードの母は、1935年7月～1936年1月まで日本に来た。その間に、東京、軽井沢、京都、大連など思い出の地を訪問し、京都には1935年9月に2週間と11月から12月末まで滞在したが、後半の滞在では娘が肺炎になったためその看病では

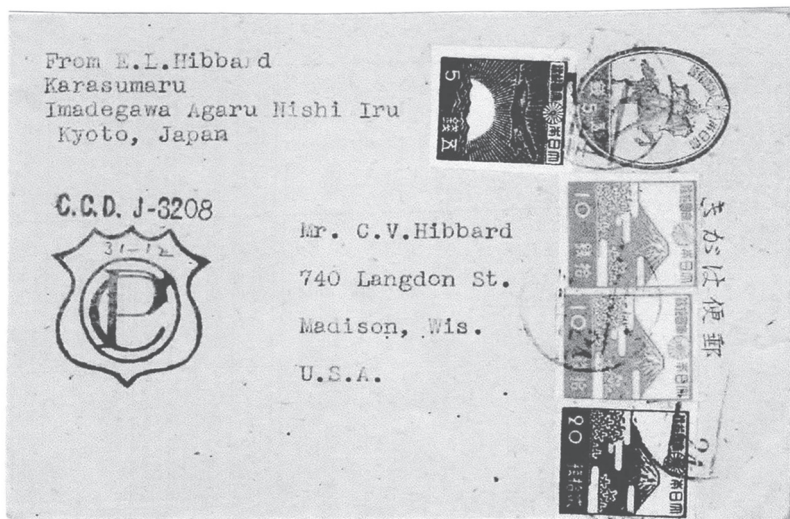
- とんどどこにも行けなかったようである。(ヒバード書簡、1935年&1936年分より)
- 34 松井七郎 (1869-1989)。同志社大学経済学部教授、1923-1927年ウィスコンシン大学に留学し、博士号取得。YMCA の総主事であったヒバードの父の世話になり、家族ぐるみの付き合いをしていた。
- 35 民間情報教育局 (Civil Information and Educational Section)：連合国総司令部 (SCAP) 幕僚部の部局の一つ。大衆に連合国軍の望む情報を教え込むことを目的とした部署であり、略称は CIE。第二次大戦終結後、戦勝した連合国軍による日本統治政策として、教育・宗教・芸術などの文化戦略を担当し、戦後の日本国民の意識形成に大きな影響を及ぼした。教育局は 6・3・3 制と男女共学の教育制度改革も行った。(〈[https://ja.wikipedia.org/wiki/ 民間情報教育局](https://ja.wikipedia.org/wiki/民間情報教育局)〉)
- 36 里見純吉 (1878-1952)。1903年慶応義塾大学理財科卒業。卒業後、日本 YMCA 同盟学生部主事となる。1906年に三越呉服店に入社、以後百貨店業界をけん引する。1922年大阪大丸の上席専務として招聘され、大丸の近代化と支店の拡充に努め、1941年大丸 2 代目社長となり、50年に会長となった。大阪 YMCA 理事長。  
(日本 YMCA 史学会編集委員会編『日本 YMCA 人物事典』日本 YMCA 同盟、2013年 9 月発行、p.111)
- 37 クリスティーナ・ロセッティ (Christina Rossetti) (1830-1894) は、イギリス、ヴィクトリア朝女流詩人。“In the Bleak Midwinter” は、クリスマスになるといつも歌われる讃美歌。日本基督教団讃美歌委員会の1954年版『讃美歌』468 番に採用されている。詩の日本語訳については、拙著「ヒバード先生の信仰体験：1972年クリスマス礼拝説教」、『アスフォディル51号』pp.149-168.) を参照されたい。
- 38 鳥取県浦富海岸でのキリスト教主義の教育キャンプ。アメリカン・ボード主催。神戸女学院生の参加が多かったが、同志社女学校も一般も参加した。ヒバードは1936年のキャンプ委員長。川田もハンディ・クラフト指導者として参加。
- 39 オナー・ソサエティ (honor society) とは、辞書によると、「(大学・高校の) 栄誉学生団体：学業成績優秀者や、時に課外活動で大きな功績のあった者が会員になれる」とある。Kappa Delta Pi (カッパ・デルタ・ファイ) は、もっとも有名なオナー・ソサエティの一つであり、アメリカではオナー・ソサエティの会員であることは社会的な名誉の一つとされる。
- 40 Rev. B. F. Shively (1880-1956)。同志社大学神学部教授。福音同胞教会派遣の宣教師。戦後の復興救援活動を推進した。シャイベリー夫人は、夫の生涯を記念して毎年奨学金を送り、それが基金となって、同志社神学生対象のシャイベリー奨学金となった。
- 41 Alice E. Gwinn (1896-1969)、アメリカン・ボード宣教師、ヒバード、クラッ

ブと一緒に住んだ。同志社女学校1925-1933、同志社中学校1947-1963、英語担当、同志社理事、同志社大学名誉神学博士1965年。戦争中はトルコで宣教師をしていた。

- 42 このバッド・ワイル (Bud Weil) とは、ヒバードのハガキの通し番号④に出てくるミシガンの教え子で、飛行機事故で死亡した人物ではないかと思われる。
- 43 この地震は、1946年12月21日午前4時19分に、和歌山県潮岬南南西沖で発生したマグニチュード8.0の昭和南海地震である。この地震は1945年の終戦前後にかけて4年連続で1000名を超える死者を出した4大地震（鳥取地震、三河地震、東南海地震）の一つである。
- 44 ヒバードの父は、当時新しいYMCA 会館建設のために、先頭に立って募金活動をし、150万ドルを集めて新会館建設を実現させた。（ヒバード書簡より）
- 45 Counter Intelligence Corps（対敵諜報部隊）とは、朝日新聞の用語解説によると、米陸軍の部隊で、軍への反逆、破壊、スパイ活動の調査や監視を任務とし、1942年に発足、60年代に改組された。CIC は占領下の日本本土でも活動した。
- 46 星名 久（1874-1954）。同志社女学校普通科1898年卒、専門科文学科1899年中退。星名謙一郎と結婚。1913年に同志社女学校に着任し、裁縫を担当。1930年より女専教授。ヒサは「同志社女子部の母」デントンの〈最大の理解者〉となり、第二次世界大戦中も含めて、37年の長きにわたり、デントンを世話し、支え、守り続けた。
- 47 高島栄子。日本語教師。ヒバード初来日の1929年以来、ヒバードに日本語の個人教授をし、親友となった。歌舞伎、文楽、寺院などの日本文化をヒバードに最初に紹介したのは、高島栄子であった。
- 48 この尼さんの一人は、前寂光院門跡の小松智光尼（1910-2003）を指すと思われる。ヒバードは、1929年に宣教師として初めて来日した直後に小松智光尼と知り合い、以後終生の友となった。
- 49 日本人学生による luck（幸運）と lack（欠乏）の書き間違いを、ヒバードもヒバードの母もよく理解し、楽しんでいる。

以下に、ハガキ原文の見本を提示する。検閲印の上の C. C. D. J-3208は、検閲者の番号である。このハガキは、ウィスコンシン大学アーカイブスに保存されているもので、映像公開を許可して下さったウィスコンシン大学アーカイブスに感謝申し上げます。





Dec. 15, 1946

Dear Dad,

The second package of dried milk which you mailed on October 10 came a couple of days ago, a month after the first, but in good condition. I wonder what made them part company. The package was the first mail I had had from Madison in three weeks.. There must be a terrific pile waiting for me somewhere.

After extended negotiations we are at last having our house rewired to accommodate our electric appliances. We also hope to have a Japanese bath installed before long so that we can get both clean and warm at least once a week.

Our food supplies are holding out pretty well. You'd laugh to see both Frances and me guzzling oatmeal and cornmeal mush for breakfast and liking it!

I hope you and the Y will have a happy New Year

ESTHER